

ここはとあるラブホテルの一室。
給料を貰ったばかりの俺は、久しぶりにデリヘルを呼ぶことにしたのだが……。

「ユリ……どうしてお前がここに来るんだよ……」

「それは「うちのセリフだし。兄貴こそ何してんのよ」



デリヘル嬢が到着し、期待に胸を膨らませながら
ドアを開けた瞬間、俺は驚愕した。
目の前に実の妹が居たからだ。

「お前、最近バイト始めたとかメールで言ってたけどデリヘルだったんだな……。なんでこんなバイトしてんだよ」



「だって学費と生活費稼がなくちゃいけないし……。トレーニングもしなくちゃいけないから……。手っ取り早く稼げるバイトって友達に紹介してもらったのよ」

こいつは俺と血の繋がった実の妹のユリだ。
今は声優の専門学校に通っている。



高校では成績の良かったユリ。
大学に進学するだろうと思っていた親は、
声優の専門学校に行きたいというユリの言葉に猛反対。

しかしユリの意思は硬く、結局親の反対を押し切った形になり、
自分で学費を稼がないといけなくなったのだ。

当然家には居づらくなり、家も出ていき、現在一人暮らしだ。学校に行きながらのバイトでやって行けるのかと不安に思っていたので、毎月2万ほど援助はしていたのだが……。

「こんな危ないバイトやめろよ。ガラの悪い連中も居るんだから。もつと他のバイトを探せよ」



「実家暮らしの兄貴には分かんないでしょ？
一人で学業と生活を両立してやっていくのって大変なんだから……」

そう言われると胸に刺さるものがある。
確かに一人で仕事と学業を両立するなんて大変だ。
だからと言って肯定するとは言おう訳ではない。

「いつから始めたんだ？」

「…2週間前くらい」

「本番とかしてないだろうな？」

「そんなの…兄貴にいう必要ないでしょ？」

「してるのか？」

「………」



ユリはそれ以上は黙り込んで答えなかった。

…なんてこった。
俺は今まで、ユリに彼氏ができる事を考えただけでも嫌だったというのに…。



ユリがデリヘルで面識のない男とセックスしている場面が一瞬脳裏に浮かんだが、あまり考えたくはない。やり場のない怒りが思いの底にうずくまる。

「…とにかく私はチエンジって事でももう帰るから。親には内緒にしといてよね。この仕事止めたら本気で生活に困るんだから…」

「…待てよ。チエンジはしない」

「えっ…?」



その言葉にユリは耳を疑うかのように、一瞬静止した。

「は、はあ…?何言ってるの?」

「兄貴として、妹の仕事ぶりをチエツクする必要はあるからな。俺もお前のサービスを受ける！」

「ち、ちよつと……私達兄妹なのに……。何考えてんのよ？キモイんだけど！（普通兄妹だったらそ」までしようと思わないよね……どういいう事？私に気があるとか……？」



おかしい事を言っているのは充分承知だ。しかし今は、大事な妹が他の男にだけサービスをするというのがどうしても許せない。

俺は極度のシスコンなのだ。
ユリにはあまりそんな素振りを見せないが、とても大事に思っている。



普段はいつもつんけんしているユリだが、可愛い一面も沢山ある。
ユリの事は俺が一番知っていたいと思っていた。

だから俺の知らないユリの顔を、他の男に見せているのはとても嫌なんだろう。

「兄貴じゃなくて、ただの客だと思えばいいだろ？
電話で言った通り、通常コース一時間だ。
ちなみに断わるなら、父さん達に言うからな？」



「わ…分かったわよ。やればいいんでしょ。やれば！
(本当にお兄ちゃんってば…「体どういっつもりなのよ…」)

「ああ…」

お互いにシャワーを済ませた後、
ユリはスマホでアラームをセットし、プレイを開始した。
実の妹と60分コースなんて、前代未聞だろう。

「うわっ……こんなに大きくなってんじゃん
（お兄ちゃんのオチンチン久しぶりに見た……）」

っい

っい

ユリがシャワーを浴びている時に、スマホで妹が本当に在籍しているのかホームページ上で調べてみた。



名刺を貰わなかったの、顔を手で覆っている数十名の写真の中から探さないとはいけなかったのだが、俺にはすぐユリを見つけたことができた。

源氏名はマキというらしい。
B95/W55/H90と書いてあった。
まあ：多分これはサブ読んでそうだけど。
可能なプレイはフェラチオ、69、パイズリ、素股、手コキ、キス等。
キスも可能と書いてあるのが、個人的にはかなりシヨックだった。

「こんなに勃起して、妹に興奮するなんてサイテーじゃん」

「しようがないだろ？お前、いい体してるから…」

「…えっ？」

シャワーをあびてバスタオル姿で出てきた妹に
俺は正直ドキツとした。
いつの間にこんなにいい体になったのだろうか。

っし

っし

「……妹の身体をそんなふうに見てるなんて気持ち悪いんだけど
（お兄ちゃんに褒めて貰った……嬉しい……）」

「じゃあ、手コキから始めるから……」

「ああ……」



ユリは持参してきたバッグからローションを取り出し、手につけた。
そして亀頭の先端からゆっくりと下へ慣らすように触り始める。

ローションの冷たさと手の感触に思わず声をあげる。

「ちよつと、変な声出さないでよ」

「しょうがないだろう？久しぶりなんだから…」

「そんな事言って、結構風俗通ってるんでしょ？」

「そんなに通ってねえよ。半年ぶりだしな」

「半年ぶりでも結構行ってるじゃん…」



「…でも兄貴が風俗行くなんて意外だった。てつきり二次元だけで三次元の女には興味ない童貞だって思ってたから」

「勝手に決めつけんなよ…。まあ…確かに二次元は最高だけどさ。俺だって普通にエロい事には興味あるからな…」

「ふーん。……で、童貞は卒業できたの?」

「い、いや…。それはまだ…」

「えっ?童貞卒業してないんだ?風俗に通っておいで?」



「そうは言うけどな…。」

デリヘルは基本的に本番行為は出来ないだろ？」

「まあね。うちも基本的にはNGだし。
ソープランドとか行かなかったの？」

「ソープは高いからなかなか手が出ねえよ。
それに大事な童貞だからな。そういう捨て方は少し躊躇する
というか…。」

くしゃ

くしゃ



「あははっ。そういう所は兄貴らしいね。
だからいつまでたっても童貞なんじゃないか（そっか、お兄ちゃん
童貞なんだ…）
つて…なんで私こんなにホツとしてるのよ」

「…なにをいってるのよ」

あつ

あつ



妹に手コキをされながらこんな話をするのはちよつとアレだが、
ユリも少しずつ笑うようになって、少し場が和んだ気がする。



「じゃあ童貞の惨めな兄貴には、少しサービスしてあげる…!」

「サービス?」